

Career education of
going on to a higher school

進学校

の vol.4

キャリア教育

京都府京都市立堀川高校(下)

教員間で練り上げ、常に意識する 学校目標「自立できる18歳」

京都市立堀川高校が全国でも有数の進学校として脚光を浴びたのは2001年度。中堅・若手教員らによる改革論議がスタートしてから8年後のことだった。「いい学校とは何か」「当たり前のこととは何か」...決してぶれることなく本質を問い続けるというオーソドックスな手法で実現した学校改革。現在でもそれは変わることなく、「よりよい教育活動の実現」を基本に指導を続けている。



校長
荒瀬克己先生



進路指導主事
森口安紀先生

>> School Data

生徒数 / 747人(男子392人、女子355人)
普通科第 類・普通科第 類・人間探究科・自然探究科 18学級
進路状況(2005年度) / 大学進学75.3%、専門学校等0.8%、
予備校等進学22.3%、その他1.6%
京都府京都市中京区東堀川通錦小路上路四坊堀川町622-2
TEL 075-211-5351
URL <http://www.edu.city.kyoto.jp/hp/horikawa/>

自分の子どもを入学させたい高校か？ “当たり前”を問う議論から改革着手

堀川高校の学校改革が始まったのは1993年頃。現在の校長である荒瀬克己先生をはじめとする30歳代、40歳代の教師が中心になってのことだった。先輩教師たちが自分の子どもを私立や国立の高校に入学させようとする現実。そこでまず、「自分の子どもを行かせたいと思えるような学校をつくらう」と考えたという。

とは言っても、まずは実践より議論が中心となる。とにかくみんなで話をした。基本は「当たり前か、当たり前じゃないか」。例えば、「勉強だけするのは当たり前か、当たり前じゃないか」というような問いを一つ一つ議論していったという。このときの「勉強だけすればいい」というのは当たり前ではない」という考え方は、今も堀川高校に根付いている。例えば勉強と部活など、2つ以上のことに力を入れ高い目標を持つべきだと指導しているのだ。英語を学習する際も、受験で問われる英語力以外の、コミュニケーションツールとしての日常的な英語力も身に付けるよう指導。常に「二兎を追う」ことを生徒に促している。そして、これらの考え方を整理した結果、学校のスタンスを「3つの約束(下図参照)」として表したのである。

90分授業案を検討。 改革を押し進める結果に

では、何から実践すればいいのか。具体的な案として、90分授業案が持ち上がった。「50分と90分の違いは単純ではなく、どの教科もがらりと教員の意識を変える必要があります。授業について全員が考え直すきっかけになるのではない」と荒瀬校長

生徒への3つの約束

1. 学校は学びの場である

学ぶ者としての謙虚さをもて。学校は君たちに多様な学びの機会を提供する

2. 学校は小さな社会である

場の状況を把握して行動せよ。学校は君たちを小さなおとなとして尊重する

3. 学校は楽しいところである

楽しさを待たな。君たちが自ら参画し参加せよ。学校は見張るのではなく、見守る

長。結局、当時は教育委員会の許可が下りず90分授業の実現には至らなかったが、およそ1年かけて賛成、反対の意見をぶつけあい議論したことが、学校改革への大きな原動力となった。

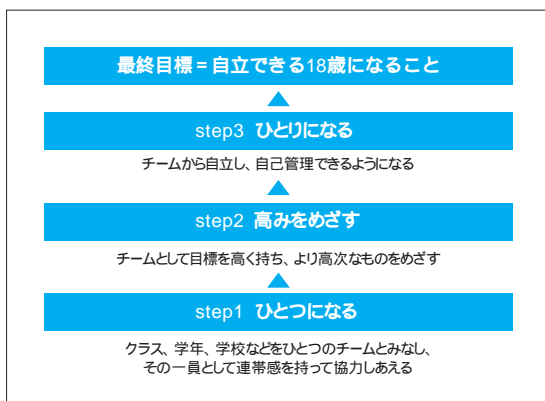
その後、95年に荒瀬校長(当時1年学年主任)が教育委員会の指導主事となり、「京都市立高等学校21世紀委員会」における京都市立高校の改革議論を推進。堀川高校はパイロット校として、人間探究科・自然探究科(詳しくは前号参照)を設置し、99年に新たなスタートを切った。荒瀬校長は98年に教頭として堀川高校に戻り、1年間で現場での準備期間に充てた。

色々な人間がいてかまわない。 めざすものが同じならば

多くの議論を重ね、実践を積んできた現在の堀川高校が、大きな目標として掲げているのが「自立できる18歳を育てる」ということだ。荒瀬校長は言う。

「普通科・探究科というのは何の技術も資格も身に付けずに卒業します。そこで、技術や資格の代わりに、生きていくための教養や、教養に裏付けられる判断力・想像力などを身に付け、人や社会と関わり合う中で自立できる人間を育てることを目標にしたのです。自立のための3つのステップ(下図参照)も実践している。探究活動にしても文化祭などの行事にしても、まずはグループで協力しあうことをめざし、次にグループで高い目標を掲げて努力する。そして、最後は一人ひとりが自立していくというステップだ。

自立のための3つのステップ



「我が校の手法は非常にオーソドックスで、基本は『よりよい教育活動を実現していこう』というものです。『自主的に学ぶ姿勢を身に付けよう』『勉強以外のことにも真摯に取り組もう』『より困難なもの、高みをめざそう』など、言っていることは当たり前のことばかりです」と荒瀬校長。「教員によって実践の方法はさまざまだし、温度差を感じることもあります。しかし、学校は小さな社会。実社会と同様、色々な人間がいるということも大切です。そんな中、当たり前のことを訴え、『自立できる18歳を育てる』というひとつの目標に向かっていけば、大きくぶれることはないのだ。

進路指導主事の森口安紀先生はこの言葉を裏付ける。「校長が機会あるごとに『自立できる18歳を育てる』ことを掲げているので、目標が明確となり、教員の間にも浸透していると思います。あとはそれに向けて自分は何をすべきなのかと自覚することが大切で、進路部としては今までのノウハウを積み上げ、主に学年団と連携しながら生徒一人ひとりの将来について考えていきます。もちろん、分掌間の連携のための会議は行っていますが、大切なのは目標を共有し、常日頃から、何事においても情報交換が出来る環境にしておくことではないでしょうか。森口先生は数値目標はナンセンスと言い切る。つまり、進路部の目標も難関大学に 人合格させることではなく、自立できる18歳を育てるということなのだ。そして、それと並行して教員の人材を育てる。「担当者を孤立させず、複数人で取り組みながら任せていく」という方法で、単なるマニュアルによる引き継ぎでなく、担当としての知識と企画力を兼ね備えた人材の育成を図ろうとしている。教員が変わっても指導力を維持、充実することをめざしてのことだ。

こうして堀川高校は全国的にも有数の進学校となった。しかし、「自立のための3つのステップでいうと、最終段階がもっとも難しい。集団のレベルアップはできるようになりましたが、個々の生徒に『高みをめざす』『ひとりになる』ということが浸透しているかというとまだまだです」と荒瀬校長。これからも、「当たり前」を真正面から伝えていき、生徒全員を自立できる18歳として卒業させていきたいという考えだ。